

2019年度 一般入試中期

全学部共通 基礎科目【学科・国語】試験問題

【時間】 60分（英語・国語・数学から2教科を選択して受験）

【学習のポイント】

センター試験の出題形式を踏まえています。評論文・随筆を中心に出题します。社会・文化・歴史・芸術などの分野について、近代以降、研究者や作家などによって書かれた文章を取り上げます。基本的な漢字・語彙の問題をはじめとして、重要語・接続詞などに留意しながら主張を読み取る問題に至るまで、国語の基礎力を測ります。自分にあった問題集を選び、傍線部の表現と設問を踏まえて、本文と対照して、選択肢を吟味する練習をしてください。

## 問題Ⅰ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アーレントは、「人間性」の原点となったポリスの公的領域における「活動」を、他者に対する<sup>(主1)</sup>「言語」的コミュニケーションを媒介とした働きかけとして理解した。そこで留意しておく必要があるのは、<sup>(主2)</sup>彼女が「言語」的活動と言っているのは、単なる「おしゃべり」ではないということだ。彼女や、フランクフルト学派第二世代の代表格であるユルゲン・ハーバマス（一九二九―）が、言語的コミュニケーション能力を「人間」の本性として重視することは、日本でもそれなりに知られている。しかし、専門の研究者も含めて、多くの日本人は「コミュニケーション」を、「言いたいことを率直に言うこと」と安易に理解しているふしがある。

「日本人は言いたいことを言わないで、Aですませようとするから、ストリートに物を言う西欧的なコミュニケーションが苦手である」という<sup>(a)</sup>ツウゾク的な発想は、それなりに当たっているかもしれない。しかし、それがアーレントやハーバマスたちが問題にしている「コミュニケーション」のすべてではない。日本人にも、やたらにおしゃべりで、しょっちゅう「本音」トークをする人は結構いるが、それらの人のほとんどは「コミュニケーション」しているとは言えない。

「コミュニケーション」とは、もともと立場の異なる「他者」同士が、互いに競い合いながら「意見」交換し、「合意＝真理」に至るプロセスである。当然、でたらめにだらだらしゃべっているだけでは、共有できるような「真理」に到達するはずはない。<sup>(b)</sup>〈process〉という英語、あるいはこれに相当するドイツ語やフランス語には、「訴訟（手続き）」という意味もあるが、コミュニケーション「プロセス」には、「裁判」の場合のような<sup>(b)</sup>ゲンミツな運営のルールや一定のスタイルが必要である。何も知らない無邪気な人間が何の準備もなくそうした場に向いて「本音」トークをしても、それによって「コミュニケーション」が始まるわけではない。「言いたいことを言う」前に、<sup>(2)</sup>そこで行な<sup>おこ</sup>われているコミュニケーション・プロセスの最低限のルールやスタイルを学習し、身に付けていなければ、何を言っても雑音にしかない。

学校のホーム・ルームを例にして考えてみよう。子供たちはまず、議論を成り立たせるためには、皆がてんでんばらばらにおしゃべりしていたらだめで、司会である先生がクラス委員に指名された者が、一人ずつ順番に「発言」するようになることを学ぶ。自分の「発言」の番まで待たねばならない。また「発言」の権利を得るには、挙手するなどして、「意志表示」しなければならない。挙手するというのは、当たり前のことのようだが、手の挙げ方やタイミングは、文化ごと団体ごとにより異なるし、その時に「はい」と声を出すべきか否かも一義的には決まらない。その場にあったやり方をしなければならない。また発言中は、全員に聞こえる程度の大きな声で話さなければならない。

もう少し高いレベルになると、情報を共有している一部の聞き手にだけ通じる話し方ではなく、出来る限りその場にいる全員に分かるように説明すること、現在話題になっているテーマからずれないように努力することなどが付け加わってくる。また、日本人はあまり気にしないが、西欧では、直前に話した相手の「意見」に対して、自分の「発言」がそれに賛成なのか反対なのか、新たな情報を付

け足すのか、関係付けを明確にすることが求められる。その他、状況やメンバーの構成によって、個人攻撃をしないとか、特定のタブーには触れない、といったことなどを心得ておく必要がある。

「コミュニケーション」を進行させるために身に付けておくべきテクニクは、それに参加するメンバーや討論のテーマによって、当然、相当ばらつきがある。一度学んだテクニクがどこでも通用するわけではないし、たとえ通用するとしてもその効果はかなり文脈に依存する。様々なタイプのコミュニケーションを経験して、自分なりのパターンを形成しておかねばならない。それが、アーレントの言う「仮面＝ベルソナ」を被ることである。「仮面」の内に集約される、自分なりに獲得したスタイルを通して、各コミュニケーション参加者は、自分の「意見」の妥当性をアピールするわけである。

人々が「人格」化していくための典型的な「コミュニケーション」の「場」としてハーバマスが想定しているのは、市民たちの「世論」を背景として発展してきた近代的な議会である。アーレントにとってのそれは、古代ポリスのアゴラ(注4)で行なわれた市民たちの自由な討議である。これらの「場」で確立された種々の様式に合わせて、人間らしい「コミュニケーション」のイメージが次第に形づくられていくわけである。

ハーバマスは、経済活動の自由を求める一部の市民たちの間で生まれたコミュニケーション形態が、次第に深化・拡大していき、やがて一つの国家の全「公民」が「政治」に参加することを可能にし、最終的には、「西欧」の限界を超えて、全人類に対して開かれた「普遍的コミュニケーション」を実現し得るという前提で、自らのコミュニケーション論を展開してきた。西欧の特定の歴史的条件下で誕生したコミュニケーション形態が、「普遍的コミュニケーション」にまで発展することが可能であるのは、すべての人間に「コミュニケーション理性」が備わっているからである。それは、物理的な手段による強制ではなく、「対話」を通して「合意」に至るべく努力しようとする能力である。そのような能力を皆が共有しているはずだから、いつかはお互いの「話が分かる」ようになると思われる、というのである。

それに対してアーレントは、人間的なコミュニケーション（＝活動）能力を、古代のポリスの特殊な歴史的環境と不可分のものと見なしている。その環境が崩れてしまえば、本来の意味での「コミュニケーション」は不可能になり、歪ゆがみが生じてくる。アーレントに言わせれば、「経済」をめぐる近代的市民（ブルジョワ）の討論は、明らかに物質的利益が絡んでいるので、どのようにして見えているように見えようと、純粹な「活動」ではありえない。近代化に伴って、人々の生活における「経済」の重みが増すにつれ、不可避免的にコミュニケーションは不純になっていく。

しかも彼女は、万人にとって生得的な「コミュニケーション理性」を想定しておらず、コミュニケーション能力をあくまでも(3)人為的に構築された「仮面」と捉えている。従って、西欧で生まれた「コミュニケーション」形態を、ポリス的な伝統をもともと共有していなかった非西欧世界にまで敷衍ふんしていきけるという論拠は、彼女の体系のなかには見出せない。ハーバマスと違ってアーレントは、コミュニケーションの普遍性を強調したことはなく、むしろそうした可能性を否定しているように思

われる。

このように言い切ってしまうと、アーレントは、「我々日本人」のような非西欧人の「人間性」を認めない傲慢な西洋中心主義者であるように聞こえてしまう。そこで、どうしてもアーレントを「正義の闘士」にしたい業界人は、彼女をハーバマス化して、あたかも普遍的コミュニケーションの可能性を信じていたかのように解釈したがるわけである。しかし、<sup>(4)</sup>筆者は、それはむしろ逆だと考えている。つまり、「人間性」というのは、あくまで西欧人の概念であると限定的に考えているアーレントの方が、謙虚ではないかと思っているわけである——この場合の「謙虚」というのは、あくまで、その思想の<sup>(c)</sup>キケツを受容する「我々」から見ての、謙虚さ<sup>d</sup>であって、その思想家個人の資質とは直接関係のないことである。

弁論術・修辞学をも含めた伝統的な「語り」の技法を、「人間性」の本質的な部分と考えるのは、アーレントの専売特許ではない。「人間性」を意味する〈humanity〉の語源になったラテン語の〈フマニタス humanitas〉は、古代・中世のヨーロッパの知識人にとって、ギリシア語やラテン語の美しい文体で書かれた「古典」を読解し、その著者の崇高なる「精神」から学ぶことを意味していた。完成された、円満な人格の在り方としての「フマニタス」を、最初に明確に定義したキケロは、<sup>(d)</sup>シユウチのように古代ローマにおける弁論術の完成者である。彼にとって「フマニタス」とは、歴史学・法学・哲学・修辞学などの学問を「教養」として身に付けていることである。

現在「(総合) 大学 university」で、社会科学をのぞく伝統的な文科系の諸科目、哲学、文学、歴史学、地理学などを総称して、「人文科学 humanity」と呼ぶのも、そうした「フマニタス」的な考え方の名残である。これらを基礎的な「教養」として習得することで、豊かな「人間性」が形成されると想定されているわけである。「教養」科目として、語学、哲学、歴史などの「人文」系の授業が大きな比重を占めるのは、それらが、「人間性」の基礎を形成するうえで、<sup>(e)</sup>不可欠だからである。

従って、大学の入学式の式辞などで、学長や学部長が、「学問を通して、単に知識を詰め込むだけでなく、豊かな人格を形成し……」と、どう考えても歯の浮くような綺麗事を滔々と述べ立てるのも、<sup>(5)</sup>西欧の「人間性」教養の伝統を念頭におけば、必ずしも根拠のないことではない。日本は、もともそうした伝統を共有していなかったもので、戦後の大学教育で、そうした考えがなかなか定着しなかった。しかもそれを理解していない文部官僚や大学<sup>(e)</sup>キャンパスの、「役に立たない教養科目はいらない」という短絡的な発想で、教養部廃止が断行されたため、現在では、「教養」というのは余計なもの、というのが学生の「常識」になっている。筆者も、いわゆる「教養科目」が、「人間性」形成に役立っているなどとは思わないが、それは、「科目」自体の問題であるというよりも、一定の「教養」概念を持たない日本文化や、それを必要と思わない学生や教師の体質の問題であろう。無論、現代の西欧諸国の大学生でも、「教養科目＝自由な技芸 liberal arts」によって「人格」を磨くなどと本気で考えている者はごく少数だろうが、そうした教育の伝統がまだ完全には途絶えていないので、少なくとも全くの空論ではない。

〔仲正昌樹〕『不自由』論——「何でも自己決定」の限界』出題の都合上、一部省略・変更した箇所が

ある)

(注1) アーレント……ハンナ・アーレント(一九〇六―一九七五)。ユダヤ系ドイツ人として生まれる。政治学者。

(注2) ポリス……古代ギリシアにおける市民の民主制が行われた政治形態を指すが、一般に「都市国家」と訳される。古代ギリシアには大小二百ものポリスがあった。

(注3) ユルゲン・ハーバマス……ドイツの社会哲学者、政治哲学者。

(注4) アゴラ……「人の集まる所」を意味し、古代ギリシアでは市場や集会所などがある公共広場を指す。市場にも使われ、市民が政治、哲学などを論じて閑暇を過したポリス的生活の中心。

(注5) キケロ……マルクス・トゥッリウス・キケロ(前一〇六―前四三)。共和政ローマ末期の政治家、文筆家、哲学者。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4、(e) 5。

(a) ツウゾク 1

- ① テニス部にシヨゾクする。
- ② 平安キゾクの生活を調べる。
- ③ ギヤクゾクの汚名を着せられる。
- ④ 遺産をソウゾクする。
- ⑤ 江戸時代のフウゾクを調べる。

(b) ゲンミツ 2

- ① イゲンのある態度をとる。
- ② 事故のゲンインをさぐる。
- ③ 決定のケンゲンをもつ。
- ④ 大仏のカイゲン供養が行われる。
- ⑤ ユウゲン実行する。

(c) キケツ 3

- ① カイキ日食が起こる。
- ② 演繹法えんえきとキノウ法。
- ③ 相手のキセンを制する。
- ④ オーケストラをシキする。
- ⑤ キソクに従って生活する。

(d) シユウチ 4

- ① 大型の台風がシユウライする。
- ② 会長にシユウニンする。
- ③ 筋肉がシユウシユクする。
- ④ イッシユウキの法要を行う。
- ⑤ カンシユウの声援に応える。

(e) カンブ 5

- ① 国のキカン産業を育成する。
- ② 雑誌がキユウカンする。
- ③ 首相カンテイに赴く。
- ④ 胸部にシツカンがある。
- ⑤ カンジンなどところを聞き逃す。

問2 傍線部(1)「彼女が『言語』的活動と言っているのは、単なる『おしゃべり』ではない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 自分が言いたいことを、的確な表現で相手に伝える事ができなければいけないということ。
- ② 相手に納得してもらうためにも、自分が合理的な主張をしなければ意味がないということ。
- ③ お互いの主張を率直に交換し、お互いが納得する結果を出すことが重要であるということ。
- ④ 規則に従って一定のやり方で主張を戦わせ、お互いが合意する過程が大切であるということ。
- ⑤ 自分の本性を相手にさらし、自分という人間を理解してもらうことが大切であるということ。

問3 空欄 A、 を補うのに最も適当な四字熟語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、A 、B 。

A

- ① 意気投合
- ② 暗中模索
- ③ 以心伝心
- ④ 一問一答
- ⑤ 当意即妙

B

- ① 是々非々
- ② 公明正大
- ③ 前途洋々
- ④ 理路整然
- ⑤ 支離滅裂

問4 傍線部(2)「そこで行なわれているコミュニケーション・プロセスの最低限のルールやスタイル」とあるが、その内容として**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

9。

- ① 参加者の構成に関係なく、言うべきことは言うという姿勢で、相手の意見に対して賛否を明らかにすること。
- ② 発言する際は司会者に従い、その権利を得るための意志表示をするなど、まわりに伝えるための工夫をすること。
- ③ 他者の意見を無視したりせず、それをふまえたうえで、かつ話題からずれることなく自分の考えを述べること。
- ④ 様々なコミュニケーションの経験をもとに独自のやりかたを確立し、テクニックを駆使しつつ、自分の意見の妥当性を主張すること。
- ⑤ 一部の人に理解されればよいというわけではなく、すべての人に理解されるように、テーマに沿って話すこと。

問5 傍線部(3)「人為的に構築された『仮面』」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、

10。

- ① 生まれながらにして人がもっている普遍的なコミュニケーションの能力。
- ② 西欧の特殊な歴史的環境下で発達したコミュニケーションにおける個々の能力。
- ③ 自分の主張をするために培ってきたオリジナルのコミュニケーションの能力。
- ④ コミュニケーションの場を通じて発展してきた合意に至ることができる能力。
- ⑤ 特殊な条件下でのコミュニケーションの蓄積から形成された普遍的な能力。



問6 傍線部(4)「筆者は、それはむしろ逆だと考えている」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

- ① アーレントは、西欧人であるか否かを問わず、人間性を尊ぶ人権主義者であり、ハーバマスのように西欧世界のコミュニケーションの形態を理想とする西洋中心主義者ではないから。
- ② アーレントは、ハーバマスとは違い、彼女を支持してそのイメージを守ろうとする業界人に、普遍的コミュニケーションの可能性を信じていたかのように宣伝されたから。
- ③ アーレントには、正義を守るために戦う思想家として熱心に信奉する人々が存在し、普遍的な価値観によって結ばれる世界を否定していたアーレント像をあえて認めなかったから。
- ④ ハーバマスは、西欧人の「人間性」を基準にコミュニケーションの普遍性を語る点で理想的に受け取られがちだが、アーレントこそ西欧の基準を押し付けられない点で評価できるから。
- ⑤ ハーバマスは、西欧人の「人間性」に依拠して普遍的なコミュニケーションの可能性を理想的に語ったが、アーレントは、その理想主義をむしろ傲慢だと捉えているから。

問7 傍線部(5)「西欧の『人間性』教養』の伝統」とはどういうものか。四十字以内で説明しなさい。句読点を字数に含む。解答番号は、12。

問8 本文の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、13。

- ① アーレントとハーバマスは、言語的コミュニケーション活動(能力)を、人間の特徴として重視するが、その能力が先天的か後天的かという点で、両者の主張は異なり、現在ではアーレントの主張が支持されている。
- ② 人格形成の場としてハーバマスは近代的な議会を想定し、アーレントは古代ポリスのアゴラを想定するが、いずれも市民の自由な討議の場として政治に寄与していくこととなり、民主主義社会の原点として、その精神は今なお健全に継承されている。
- ③ すべての人間には対話を通して合意に至ろうとするコミュニケーション理性が備わっているので、このコミュニケーション能力により、人はいつかわかりあえるという平和な世の中が到来することを期待している。
- ④ 西欧世界で形成された「人間性」に基づくコミュニケーションの形態を、非西欧世界の人にも共有できると考える点は、アーレントとハーバマスとで共通するが、筆者は非西欧世界に押し広げて考えない方が謙虚だと考えている。
- ⑤ 人文科学と総称される西洋の伝統的な教養科目群は、その成り立ちの背景となったコミュニケーションの文化を持たない日本では今や消えつつあるが、筆者はその有用性を議論することを、無駄ではないと考えている。

## 問題Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いろいろな人と知識について話をし、「知識≡事実」のエピステモロジー<sup>(キ)</sup>を聞いたときに私が思い浮かべてしまうのは、ドネルケバブである。ドネルケバブは肉片を集成してつくる巨大な竹輪<sup>ちくわ</sup>のようなもので、トルコの伝統的な料理だ。

知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的事実」として存在し、その断片を人から教えてもらう。「知識≡事実」のエピステモロジーでの知識モデルは、「客観的な事実」である知識片をぺたぺた表面に貼り付けていって、ひたすら大きくしていくイメージを<sup>(a)</sup>カンキさせる。そこで私はこれを「知識ドネルケバブ・モデル」と呼んでいる。

エピステモロジーは、思考力、学習力と深い関係がある。ドネルケバブ・モデルの知識観と、<sup>(1)</sup>知識を、常に再編成を繰り返すダイナミックなシステムとして捉える知識観とでは、目指す思考のありかたも、理想とする学びのあり方もまったく異なる。エピステモロジーには発達の段階がある。そして、それぞれの段階の知識観は、知識獲得、つまり学習と密接につながっている。コロンビア大学教授のディアナ・キューンによれば、エピステモロジーは「絶対主義」→「相対主義」→「評価主義」という三つの発達段階をたどっている。

小学生の多くは、知識は人によって解釈され、構築されるものであることを理解していない。彼らは科学者によって発見された知識が絶対的に正しい事実であると思っ<sup>(2)</sup>ているし、科学者の仕事は「世界に存在する客観的事実を集めてくる」ことであると思っ<sup>(2)</sup>ている。言い換えれば、知識は常に絶対的に正しい・正しくない、と二色に分けることができ、「正しい知識」は<sup>(2)</sup>ドネルケバブの肉片のように切り取られた形で世界に存在するものと考えているわけだ。

もう少し発達が進むと、知識は解釈されるものである、ということはわかってくる。ただし、「自分は自分、人は人」というスタンスをとり、データの多様な解釈、多様な仮説、多様な理論は、それらが互いに対立するものであっても、どれでもOKだと考えてしまう。つまり、仮説や理論は様々な方面から検討・吟味・評価された上で最も論理的に<sup>(b)</sup>イッカンし、頑強なものが選ばなければならない、ということを理解していない。この段階のエピステモロジーを持つ人は、知識が構築されること、したがって絶対的でないことは知っている。しかし、知識がどのように構築されるかを理解していないので、どれもが正しい、という相対主義に陥ってしまったのである。

次のもっとも高い水準の発達段階になると、知識は単なる「考え」とは違うことを理解するようになる。とくに科学的知識とは、

・ 証拠によって実証されるべきものである。

・ そのためにはモデルを構築し、実験によって具体的に吟味可能な仮説を立て、実験からの証拠に照らして評価されなければならない。

・ 仮説は多くの場合、複数あり、それらの仮説のうち、どれが最もすぐれたものであるかを、証拠に照らして評価する必要がある。

ということを理解するようになる。

科学を学習する目的は、科学者によって発見された「事実」を覚えることではない。今日覚えた（その時には「真実」と思っていた）事実や理論が、一〇年後には<sup>(c)</sup>キキャクされているかもしれない。

科学はデータをもとに論理を組み立て、理論を構築するプロセスである。では、「科学を实践する」ために、子どもは何を学ばなければならないのだろうか？ 学校で、理科の時間などで実験をし、データをとり、分析する、という学習はしているだろう。しかし、それらは「科学を行う」ための要素に過ぎない。科学的思考ができるようになるために必要なのは、むしろ、理論の検討のしかた、仮説の立て方、仮説の検討のための実験のデザインのしかた、データの解釈の仕方、結論の導き出し方、などの論理を組み立てる<sup>(1)</sup>、<sup>(2)</sup>スキルなのである。

もちろん、ここでいう「科学」は自然科学に限らない。心理学はもちろんのこと経済学、法学、社会学のような社会科学も同じだ。さらに敷衍<sup>ふえん</sup>すれば、どのようなことであれ、単なる好き嫌いではなく、理にかなった意思決定をするために、（単なる「論理スキル」ではなく）論理構築スキルに<sup>(d)</sup>則った思考が必要である。

いま、いたる所で「<sup>(3)</sup>批判的思考」ということばを聞く。しかし、批判的思考の定義に関して、ほとんどの人はあやふやな考えしか持っていないようだ。さきほど述べたエピステモロジーの発達段階を提唱したディアナ・キューンは、「批判的思考」は「argue」する能力だという。「批判的思考」はもともと英語の「critical thinking」の訳である。そして、このことばと必ずペアになって使われる概念が「argue」という動詞なのである。

これらの言葉はどちらも翻訳がとて難しい概念で、実際、多くの日本人はどちらのことばも誤解して捉えていると思う。ある英和辞典では「argue」は「論じる、論議する、論争する」が第一の語釈になっていて、第二の語釈として「口論する、言い争う」がある。この語釈のために、「argue」という語によいイメージを持つ日本人は少ない。しかし、これらの語釈は「argue」という言葉の本質をまったく表していない。

英英辞典の方がこれらのことばの meaning に近い語義を与えている。例えば、オックスフォード学習者英英辞典では、「Give reasons cite evidence in support of an idea.」とある。ここで出てくる「evidence」という言葉が非常に大事なキーワードである。「argue」とは、ある考えがあったら、その正当性を打ち立てるために「evidence」（証拠）を積み上げて論理をつくっていくという意味なのである。

批判的思考とはつまり、科学的思考と基本的に同じで、ある仮説、理論、あるいは言説を、証拠にもとづいて論理的に積み重ねて構築<sup>(4)</sup>していく、思考のしかたのことを言う。単に「感情にとらわれず客観的にものごとを考える」とか「多角的に物事を検討する」ということではないのだ。

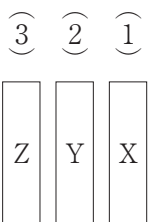
このような科学的思考、批判的思考の<sup>(5)</sup>バックボーンになっている仮説検証のプロセスと理論構築のプロセスはもちろん、本で読んだだけ、あるいは誰かに説明されただけでは理解できない。知識（理論）を構築していく実際の道筋がわからないと、様々な仮説を適当に立てるだけで終わってしま

う。自分で仮説を考え、実験をデザインし、データを取って分析し、吟味し、論を構築し、それを評価する。「批判的思考」はこのようなプロセスを何度も繰り返し経験すること、つまり、「体で覚える」ことによって初めて体得できるのである。

批判的思考（科学的思考）とエピステモロジーとは互いを支え合い、互いを引っ張り上げながらも発達する。ドネルケバブ・モデルのエピステモロジーを持つていたら、批判的思考は習得できないのは改めて言うまでもないことだ。だから、思考力を養うためにはエピステモロジーを発達させ、成熟したエピステモロジー、つまり評価・構築主義のエピステモロジーを持たなければならないのである。

科学的思考、批判的思考は学びの達人になるためにとっても大事で、最近では教育界のキーワードになっている。他方、熟達者の特徴は鋭い直観力にあることも、誰もが認めるところである。批判的思考を重要視することは直観的思考をどれだけ（d）ハイジヨできるか、と考えられるのに、この「矛盾」はどのように考えればよいのだろうか。

じつは「直観」ということばは、いくつかの意味合いを持つ。三つの形を考えてみよう。



(1) から (3) はすべて一般的には「直観的思考」と考えられる。しかし、その判断の精度や質はそれぞれ異なる。(3) は非常に精度が高い判断。(2) はいわゆる「スキーマ」に頼った思考で、「当たらずとも遠からず」の判断になる場合もよくある。(1) の判断はまったく偶然のレベルである。これら三つの形の「直観」は、まったく違う種類の思考というよりは、判断の拠り所となる背景の知識のありかたが違う思考と考えたほうがよい。豊富で精緻な知識を持っていれば直観の精度は上がり、「ひらめき」になる。知識がないところで直観に頼れば、「あてずっぽう」になってしまう。

科学者にも直観は大事だ。そもそも、理論を構築するためには仮説がなければならない。仮説をつくるときに直観は絶対に必要である。ニュートンの万有引力の発見も、ケプラーの楕円（だえん）（e）キドウの発見も、データを積み上げて吟味する批判的思考だけで生まれたわけではない。批判的思考により、仮説とデータが整合的に一致しているかを検討することは絶対に必要だ。しかし、現象のしくみを説明するための仮説をつくるには「ひらめき」が必要で、それには熟達した科学者の直観がモノをいうのである。

知識は常に変化をつづけている流動的なものだし、最終的な姿は誰にもわからない。最終的な姿がわからないのにシステムを構築するためには、要素を増やしつつ、それに伴ってシステムも変化させながら、成長させていくしかない。「<sup>(4)</sup>生きた知識のシステム」を構築し、さらに新しい知識を創造していくためには、直観と批判的思考による熟慮との両方を両輪として働かせていく必要がある。

子どもは完璧でなくてもよいから、とにかくコミュニケーションをするためにたくさん単語を短期間で学習したい。大人の実社会でも多くの場合、非常に短い時間で判断を迫られる。そういうときには直観に頼らざるをえない。他方、自分の思考や行為を自分で III モニターし、意識的に過ちを見つ

けようとしなないとなかなか過ちは見つからず、知識の修正はされない。どの分野でも、本当の達人は、常識的な「思い込み」を排除して現場を観察し、記憶や判断がスキーマで歪まないように意識的なコントロールをしている。例えば、将棋では対局の後の感想戦で対局を振り返る。これはいわば批判的  
思考だ。一手一手を吟味して、他によりよい手がなかったかを振り返る。

どの分野でも多かれ少なかれ、達人たちはこのような「振り返り」をしているはずだ。直観に頼った素早い判断、素早い学習は、熟慮による修正を伴って初めて、精緻な知識のシステムへ成長していくことが可能になるのである。また、それが直観力をさらに磨くためにも必要なことなのだ。

（今井むつみ『学びとは何か——〈探究人〉になるために』出題の都合上、一部省略・変更した箇所がある）

（注）エピステモロジ……人間が科学知識を生産あるいは実践する現場で、どのように認識するかについての研究。科学認識論。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含むものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 14、(b) 15、(c) 16、(d) 17、(e) 18。

(a) 14

カンキ

- ① 阿鼻キョウカンの世界。
- ② 外貨を日本円にカンキンする。
- ③ 好プレーにカンセイをあげる。
- ④ カンゼン懲悪の物語。
- ⑤ ボウカン具を着込む。

(b) 15

イツカン

- ① ラストシーンがアツカんだった。
- ② カンセツ的に伝える。
- ③ 何事にも辛抱がカンヨウだ。
- ④ 初志をカンテツする。
- ⑤ 忘年会のカンジを引き受ける。

(c) 16

キキヤク

- ① キタイに満ちた入学式。
- ② 権利をホウキする。
- ③ 結果をキロクする。
- ④ ギシンアンキに陥る。
- ⑤ キゲン前三五〇〇年。

(d) 17

ハイジヨ

- ① 古い制度をテツパイする。
- ② 予選リーグでクハイをなめる。
- ③ 神社にサンパイする。
- ④ ハイガイ主義的な言動が増える。
- ⑤ ハイイロの粉塵が舞う。

(e) 18

キドウ

- ① キセンに関係なく平等に扱う。
- ② ジョウキを逸した行為。
- ③ 手先のキヨウな人。
- ④ コツキを掲揚する。
- ⑤ 大将同士のイツキ打ち。



問2 傍線部Ⅰ～Ⅲの本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、Ⅰ 19、Ⅱ 20、Ⅲ 21。

Ⅰ スキル

19

- ⑤ 配列  
④ 選択  
③ 技能  
② 方法  
① 規模

Ⅱ バックボーン

20

- ⑤ 対立軸  
④ 要素  
③ 裏面  
② 背景  
① 弱点

Ⅲ モニター

21

- ⑤ 計測  
④ 実験  
③ 調査  
② 鑑賞  
① 観察

問3 傍線部(1)「知識を、常に再編成を繰り返すダイナミックなシステムとして捉える知識観」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、22。

- ① 科学者によって発見された知識は議論が尽くされているので、客観的事実として尊重するべきだという考え方。
- ② データに基づいて解釈された多様な理論が知識として相互に矛盾していても、等しく認めるべきだという考え方。
- ③ 学びと切り離して仮説に基づいた実験を行い、データを集積して分析されたものだけが知識であるという考え方。
- ④ 蓄積されてきた知識を踏まえながらそれを克服し、独自性のある知識としてデザインするべきだという考え方。
- ⑤ 証拠に基づいて理論的に積み重ねて検討し、構築していく思考の対象として知識を捉えるべきだという考え方。

問4 傍線部(2)「ドネルケバブの肉片のように切り取られた形で世界に存在するもの」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 科学者たちが発見した事実を正しい知識として集積することで、世界が理解できるという考え方を具体的に説明している。
- ② 科学者たちが発見した主観的事実が貼り合わされて、正しい事実になっていく過程が重要であるという筆者の考え方を象徴的に説明している。
- ③ 多くの科学者たちの英知が集積されることで正しい科学史が成立していることを、具体的な物象を通してわかりやすく説明している。
- ④ 科学の常識が、科学者同士のためまぬ論争によって相対化されていく様子を可視化することで、印象的に説明されている。
- ⑤ 科学者たちが発見した客観的事実が世界に偏在し、それを集めることが世界認識の方法としてすぐれていることを比喩的に説明している。

問5 傍線部(3)「批判的思考」とあるが、これはどのようなことによって得られるのか。四十字以内で説明しなさい。句読点を字数に含む。解答番号は、。

問6 本文中の 、、 に入る文として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、 、 、 。

- ① 将棋の達人は、次の一手についてあれこれ可能性を考えなくても最善の一手が頭に浮かぶ。
- ② ある状況で何がしかの判断をするとき、知識がないときは、コイントスのように適当にするしかない。
- ③ 子どもが単語の意味を考えると、「形ルール」のようなスキーマに沿って、その場ですぐに初めて聞いた単語の意味を考え、その単語が使える範囲を決めてしまう。



問7 傍線部(4)「生きた知識のシステム」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、28。

- ① 一見、相容れない科学的思考と直観的思考とを両立させ、要素を拡大し、知識を変化させていくことで発展できるシステム。
- ② ときには批判的思考、ときには直観的思考を用い、綿密な計画の元に世界を立て直しながら、進歩できるシステム。
- ③ 直観的思考と科学的思考とを融合させながら、客観的な要素を拡張させていくことで、定めた目標を達成できるシステム。
- ④ 批判的思考から直観的思考へと段階を上げることで、仮説をつくる上で必要不可欠な「ひらめき」を生み出すシステム。
- ⑤ 科学的思考による精度の高い考察によって、紙一重な「あてずっぽう」と「ひらめき」を明確に区別するシステム。

問8 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、29。

- ① 知識は人によって解釈され、構築されるものなので、データの多様な解釈、多様な仮説、多様な理論は、それらが互いに対立するものであっても、知識が絶対的なものでない以上、どれも正しい。
- ② 自然科学と社会科学との決定的な知識の違いは、直観的な思考と論理的な思考という思考方法の違いであるが、真理を求める点はいずれも同じであり、それらは批判的思考によって習得される知識である。
- ③ ドネルケバブのようなエピステモロジーではなく、科学的思考によるエピステモロジーが知識の習得のための目指すべき思考のありかたであり、その知識観は真理へと至るための三つの発達段階をたどる。
- ④ 科学的思考と直観との関係は、それぞれに磨いていくことによって、それぞれの真理へと到達する二つの思考方法として成長させていかなければならないものであって、両立させることのできるものではない。
- ⑤ 知識は常に変化をつづけている流動的なものなので、生きた知識のシステムを構築し、さらに新しい知識を創造していくために、直観と批判的思考による熟慮との両方を両輪として働かせていく必要がある。

解答一覽

問題 I

正解	解答番号
5	1
1	2
2	3
4	4
1	5
4	6
3	7
4	8
1	9
2	10
4	11
記述問題	12
5	13

問題 II

正解	解答番号
1	14
4	15
2	16
4	17
2	18
3	19
2	20
1	21
5	22
1	23
記述問題	24
2	25
3	26
1	27
1	28
5	29